風景構成法における用紙のサイズに関する研究

On the Size of the Drawing Paper in the Landscape Montage Technique

仲原千恵[1)]・佐渡忠洋[2)]・鈴木　壯[3)]

NAKAHARA Chie, SADO Tadahiro and SUZUKI Masashi

キーワード：風景構成法・用紙のサイズ・構成型

Ⅰ　問題と目的

風景構成法（以下，LMT）は，1969年に中井久夫によって考案された投影描画法である（山中，1984b）。本技法は心理アセスメント技法としても治療技法としても用いることができ，今日，幅広い臨床場面で用いられている。

これまでに，LMTに関する研究は数多く行われており，それらは臨床研究と基礎研究とに大別できる。臨床研究は，主として対象者の特性と風景画の特徴との関係が報告されている。例えば，中井（1971）は妄想型と破瓜型の統合失調症者の風景画を類型した上で，統合失調症者には特異な空間の歪みが生じることを見出し，石川（1983）は境界例の空間の歪みは部分的なものに留まることを報告している。

一方，基礎研究はアイテムの提示順序（皆藤，1990），再検査信頼性（皆藤，1992），発達による推移（山中，1984a）などが検討されている。しかし，LMTの臨床的妥当性を実証する上で十分な数とは言い難い。特に，LMTの用具に関する研究は，筆者らが調べた限り報告されていない。

ところで，酒木（1991）はプレイルームの中や箱庭の箱，用紙，写真など，世界を分断して制限する状況で顕れる空間を「ここ空間」と名付けている。それは「自己の中に組み込まれた世界」であり，「ここ空間には自分の世界が真正面に映し出される」と言う。この酒木の論をLMTで考えるならば，描画するための空間，つまり描画課題として見守り手（検査者）から描き手（対象者）へ渡される用紙と考えることができる。それは，用紙が区切られた世界でありながらも，自らの内面を表現する空間と考えられるためである。

また一般に，投影描画法の解釈では描き手に渡される用紙は，対象者にとっての「環境」と考えることができる（市来・金井・内藤，2005）。そしてその用紙に対して，描き手がどのように内的世界を表現するかを見ることで，彼らの活動性の程度やエネルギーの処理様式といった「環境」との相互作用のあり方を見ていくことができる（市来ら，2005）。したがって，LMTの描画過程では，描き手は用紙から絶えず影響を受けつつ，その空間を対処する体験プロセスがあり，それは描き手と空間との相互的な交流があるため，二重の投影が成り立っているといえる。

このように，描画において用紙は重要な役割を担っている。とりわけ用紙のサイズは，描画する領域に直接関係するために，描き手の描画体験に強く影響すると考えられる。

LMTは通常，A4版の用紙が用いられるが，「厳密にこの条件にこだわる必要はない」（皆藤，1994）との指摘がある。したがって，用紙のサイズという要因については未だ十分討論されておらず，各々の臨床家が任意にサイズを決定していると考えられる。The Diagnostic Drawing Seriesを用いて用紙のサイズの違いと描画表現との関係を検討した報告によれば（市来ら，2005），用紙のサイズが異なっても，

1) 長良医療センター／Nagara Medical Center
2) 岐阜大学保健管理センター／Health AdministrationCenter, Gifu University
3) 岐阜大学教育学部／Factory of Education, Gifu University

描画様式はおおむね変わらないことが報告されている。しかし，アイテムを順に投影し，その空間から描き手も影響を受けるLMTでは，The Diagnostic Drawing Seriesと同様の結果が得られるとは考えにくい。

以上のことを踏まえ，本研究の目的は，LMTの用紙のサイズの違いによって，描画特徴にどのような違いがあるかを検討することとする。

Ⅱ　方法

1. 調査期間

2008年10月上旬〜同年11月下旬に調査した。

2. 対象者

総合大学Aの大学生53名，および大学院生10名の計64名（平均年齢21.2±2.21歳）。内訳は，男性35名，女子29名であった。

3. 調査内容

(1) 風景構成法と用紙のサイズ

LMTは皆藤（1992）に従って実施した。調査に用いる用紙はB4（25.7×36.4cm）A4（21.0×29.7cm），B5（18.2×25.7cm），の３つのサイズを用いた。この３つのサイズを採用したのは，わが国では一般的にA版・B版の単位で用紙のサイズを表すことが多いこと，そして，一般的にLMTではA4サイズで施行されることから，通常版よりも一回り大きいサイズ（B4）と小さいサイズ（B5）を用いることで，用紙のサイズの要因を検討できると考えたためである。

(2) 描画後の自己評価式の質問紙

用紙のサイズが変われば，描き手の描画体験も変化すると考えられる。そこで，描画後に対象者が自ら描いた風景画に対して，自己評価式による印象の評価を求めた。そのSD用形容詞対は，イメージ技法の評価を行った研究（岡田，1984；弘田，1988；今村，2004）を参考に，対象者の負担等も考慮して筆者らが新たに作成した質問紙（17項目５件法）を用いた。その内容は，「雑然とした―まとまった」「雑な―丁寧な」「好き―嫌い」「萎縮した―のびのびした」「闘争的―平和的」「不調和な―調和的な」「気持ち悪い―気持ちいい」「単純な―複雑な」「せまい―広い」「静的な―動的な」「粗野な―繊細な」「貧弱な―豊かな」「近景的な―遠近的な」「不安定な―安定した」「拡大的な―収縮的な」「緊張した―くつろいだ」「弱い―強い」である。

表１　実施条件のグループ分け

	１回目	２回目	人数
A群	A4	B5	12名
B群	B5	A4	10名
C群	A4	B4	12名
D群	B4	A4	11名
E群	B5	B4	10名
F群	B4	B5	9名

4. 実施手順

対象者を人数が均等になるようにランダムに６群に分け，１人の対象者に２つのサイズでLMTが実施できるようA群からF群の６群にグループ分けを行った（表１）。調査は20名程度が受講可能な講義室で，集団法で実施した。１回目と２回目のLMT実施には14日の間隔をおいた。対象者へ異なる用紙のサイズで２回のLMTを実施することは告げなかった。また，対象者らに対して調査期間中，互いに描画について話すことは控えるように教示した。

5. 分析

描画特徴を数量化するために，皆藤（1994），川口（1995），高石（1996）の研究を参考に，筆者らによる読み取り指標を作成した（巻末資料参照）。構成型に関しては高石（1994）の分類法（表２）を採用した。

得られた128枚（64名×２回）の風景画は，上述の読み取り指標に従い，３名の評定者によって評価された。評定者は，臨床心理学専攻の大学院生と大学院の修了生とした。評定の際，１つの項目に複数該当する表現が認められた場合，すべてをカウントするよう求めた。評定の後，２名以上の一致が認められたものを最終評価とした。なお，本研究における評定者間全一致率は75.3%であった。

３つの用紙のサイズにおける読み取り指標と構成型の出現度数はχ^2検定を，描画後の自己評価式の質問紙の平均値は分散分析を用いて比較した。

表 2　風景構成法の構成型と分類基準（高石，1994）

構成型	分類基準
Ⅰ　羅列型	全要素バラバラで、全く構成を欠く
Ⅱ　部分的統合型	大景要素（#1）同士はバラバラだが、大景要素と他の要素（中景・小景）とが、一部結び付けられている。基底線（#2）の導入が認められることもある。
Ⅲ　平面的部分的統合型	大景要素と他の要素の結びつきに加えて、大景要素同士の構成が行われている。しかし、それは部分的な統合にとどまり、「空とぶ川」「空とぶ道」などの表現が見られる。彩色されていない空間が多く残り、宙に浮いた感じが特徴的である。視点は不定で、複数の基底線が使用されている。遠近・立体的表現はない。
Ⅳ　平面的統合型	視点は不定多数だが、視向（#3）は概ね正面の一方向に定まり、全ての要素が一応のまとまりをもって統合されている。しかし、遠近・立体的表現は見られず、全体として平面的で貼りついたような感じが特徴的である。奥行きは上限関係として表現されている。
Ⅴ　立体的部分的統合型	視向が正面と真上（あるいは斜め上方）の 2 点に分かれ、部分的に遠近法を取り入れた立体的表現が得られる。しかし、大景要素間でも立体的表現と平面的表現が混在し、全体としてはまとまりを欠く分裂した構成になっている。「空からの川」など画用紙を上下に貫く川の表現が特徴的であり、その川によって分断された左右の世界が、二つの別々の視点から統合されていたりする。鳥瞰図や展開図的表現が見られることもある。
Ⅵ　立体的統合型	視点・視向とも、斜め上方あるいは正面の 1 点に概ね定まり、全体が遠近・立体感のあるまとまった構成になっている。しかし、「平面的な田」「傾いた家」など一部に統合しきれない要素を残している。
Ⅶ　完全統合型	一つの視点から、全体が遠近感をもって、立体的に統合されている。

表 3　用紙の大きさによる「道」の比較

項目	B4 (n=42)	A4 (n=45)	B5 (n=41)	χ^2検定
空からの道	5	5	2	*n.s.*
途切れる道	9	10	9	*n.s.*
山道	3	12	10	+

+=p<.10

なお調査中，小さいサイズを指定された対象者の方が大きいサイズを指定された対象者に比べ，早く描き終える傾向にあった。そのことにより，描画時間に差が生まれ，アイテムに手を加え，数を増やす行為が認められたため，「付加物の内容」は分析対象から除外した。

Ⅲ　結果と考察

1. 形態の検討

読み取り指標の出現度数を 3 つの用紙のサイズで比較した結果，「山道」においてのみ有意な傾向が認められた（表 3 ）。残差分析の結果，B4サイズの用紙で「山道」を描写するものが

有意に少ない傾向が明らかとなった。それ以外のすべての描画項目では有意な差は認められなかった。

B4サイズの用紙で「山道」が少ないという結果は，用紙が最も大きい場合，「山」に繋がる「道」が少ないことを示している。しかし，これは統計学的分析における偶然の結果かもしれない。したがって，B4・A4・B5サイズでLMTを描いた場合，本研究の対象者は形態にほとんど差はないと理解した方が妥当であろう。

2. 構成型の比較

風景画の構成型を高石（1994）の基準に従って分類した結果，本研究の対象者は「Ⅴ型」「Ⅵ型」「Ⅶ型」を示す者が大半であった。高石（1994）も「大学生を対象にした構成型の比較研究において，Ⅰ～Ⅲ型に該当する作品は出現せず，遠近法・立体的表現法を全く用いないⅣ型が稀に見られるのみで，ほとんどの作品がⅤ～Ⅶ型の立体的な統合型に達していた」と述べている。そのため，本研究では「Ⅰ型」「Ⅱ型」「Ⅲ型」「Ⅳ型」はまとめて一群と考え，検討することとした。

分類した構成型の出現度数を３つの用紙のサイズで比較した結果，すべての項目で有意な差は認められなかった（表４）。

LMTで風景を構成するためには，自我の関与が不可欠である。それは，個々のアイテムが順に提示され，それらを用紙に収めながら全体

表４　用紙の大きさによる構成型の比較

構成型	B4 (n=42)	A4 (n=45)	B5 (n=41)	χ^2検定
Ⅰ～Ⅳ型	0	2	1	
Ⅴ型	12	15	16	*n.s.*
Ⅵ型	25	20	17	
Ⅶ型	5	5	8	

表５　用紙の大きさによる自己評価の平均値（*SD*）の比較

項目（1―5）		B4	A4	B5
1.	雑然とした―まとまった	2.8（1.27）	3.1（1.20）	3.2（1.22）
2.	雑な―丁寧な	2.2（0.94）	2.1（0.93）	2.3（1.16）
3.	嫌い―好き	3.6（0.91）	3.7（0.91）	3.6（1.01）
4.	委縮した―のびのびした	4.0（0.95）	4.1（0.82）	4.1（1.06）
5.	闘争的な―平和的な	4.8（0.48）	4.7（0.73）	4.7（0.67）
6.	不調和な―調和的な	3.8（1.03）	3.5（1.27）	3.5（1.09）
7.	気持ち悪い―気持ちいい	4.0（0.88）	4.0（0.93）	4.0（1.08）
8.	単純な―複雑な	1.9（1.00）	1.8（0.91）	1.9（0.94）
9.	せまい―広い	4.1（0.89）	4.1（0.95）	4.1（1.08）
10.	静的な―動的な	2.6（1.13）	3.0（1.30）	2.8（1.38）
11.	粗野な―繊細な	2.1（0.86）	2.5（0.88）	2.3（0.95）
12.	貧弱な―豊かな	3.7（1.07）	3.6（0.97）	3.8（0.96）
13.	近景的な―遠景的な	3.5（1.22）	3.8（0.88）	3.7（0.91）
14.	不安的な―安定した	3.6（0.99）	3.5（1.11）	3.6（0.97）
15.	拡大的な―収縮的な	2.8（1.01）	2.6（0.87）	2.5（0.94）
16.	緊張した―くつろいだ	4.1（1.06）	4.3（0.89）	4.3（0.79）
17.	弱い―強い	3.0（0.80）	2.8（0.81）	3.0（0.87）

として統合することを描き手は求められるからである。つまり，全体を統合していくには，視点を空間的にも時間的にも一つに固定し維持せねばならず，その過程で自我には適切な対象把握が求められている（武藤，2002)。用紙のサイズが大きくなり，空間が広がれば，自我にかかる負担もより大きくなると推測できる。

しかし，本研究の対象者は，用紙が大きくなっても，低次の構成型にはならなかった。つまり，用紙のサイズに左右されず，視点とアイテムとの距離を保ちつつ，風景を完成させることに成功している。これは，大学生や大学院生のような対象者の場合，用紙のサイズが大きくなっても柔軟に対処できるからもしれないし，彼らがそれだけ健全な自我を備えているからかもしれない。

3. 自己評価式の質問紙結果の比較

自己評価の各項目を３つの用紙のサイズで比較した結果，全ての項目で有意な差は認められなかった（表５)。したがって，本研究の対象者は，描く用紙のサイズに変化が生じても，自身の風景画に対する印象が変わらないといえる。

用紙のサイズが変化しても，自身の風景画の印象が変化しないことは，個人の内的世界の風景とは一定以上の恒常性を有している，または自分の内的世界に対して安定した評価を行っていると考えられる。

Ⅳ　まとめと今後の課題

本研究の結果から，LMTの用紙のサイズが大きくなろうとも，小さくなろうとも，風景の形態や構成型，そして描いた風景画の自己評価に変化が生じないことが示唆された。すなわち，LMTの用紙がA4であることに「こだわる必要はない」（皆藤，1994）という指摘に通じる結果であった。

しかし，本研究は幾つか解決すべき研究方法上の問題を有するため，明確な結論を出すことには慎重であらねばならない。今後は，繰り返し効果をどのように相殺するか，対象者の多様さをどのように保証するかを工夫し，さらなる検討を続けたい。

文献

1) 弘田洋二・長屋正男（1988)「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究．心理臨床学研究，5(2)，43-58.
2) 市来百合子・金井菜穂子・内藤あかね（2005）描画表現の比較：DDSの日本における適用への模索．日本芸術療法学会誌，36（1・2)，65-72.
3) 今村友木子（2004）印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析．心理臨床学研究，22(3)，217-227.
4) 石川嘉津子（1983）境界例の風景構成法から．芸術療法，14，43-49.
5) 皆藤章（1988）風景構成法の読み取りに関する一考察―構成プロセスについて．人文研究（大阪市立大学文学部紀要)，40（7)，37-60.
6) 皆藤章（1990）風景構成法の基礎的研究――アイテムの提示順序について．教育論集（大阪市立大学文学部教育学教室紀要)，16，1-12.
7) 皆藤章（1992）風景構成法の基礎研究（4）―再検査信頼性．日本心理臨床学会第11回大会発表論文集，212-213.
8) 皆藤章（1994）風景構成法―その基礎と実践．誠信書房.
9) 川口智（1995）養護施設入所思春期児童の心象風景―風景構成法からみた一考察．兵庫県児童相談所研究紀要，1，21-29.
10) 武藤誠（2002）風景構成法のアイテム選択における二つの指向性．京都大学大学院教育学研究科紀要，48，224-235.
11) 中井久夫（1971）描画を通してみた精神障害者，とくに精神分裂病者における心理的空間の構造．芸術療法，4，13-24.
12) 岡田康伸（1984）箱庭療法の基礎．誠信書房.
13) 酒木保（1991）枠の機能と枠内構造「ここ」．森谷寛之ほか　心理臨床学の冒険．星和書店．pp. 1-25.
14) 高石恭子（1994）風景構成法における大学生の構成型分布と各アイテムの分布．甲南大学学生相談室紀要，2，　38-47.
15) 高石恭子（1996）風景構成法における構成型の検討―自我発達との関連から．山中康裕（編）風景構成法その後の発展．岩崎学術出版社．pp. 239-264.
16) 山中康裕（1984a)「風景構成法」事始め．H・NAKAI　風景構成法．岩崎学術出版社．pp. 1-36.
17) 山中康裕（1984b）H・NAKAI　風景構成法．岩崎学術出版社.

資料　風景構成法の読み取り指標

項目			項目		
川	形態	空からの川	ひと	行為	労働
		護岸			遊び
		途切れる川			静的運動
		橋がかかっている			動的運動
	面積	1/5 以下			対人状況
		1/5 以上	動物		哺乳類
	流れ	右上→左下			鳥類
		左下→右上			魚類
		左右			昆虫類
		上下			その他
		その他	空白	割合	1/5 以上
山	形態	稜線の枠超え			1/5~1/10
	大きさ	1/5 以下			1/10 以下
		1/5 以上			空白なし
田	収まり	よい	彩色	割合	全彩色
		悪い			一部無彩色
	面積	1/10 以下			アイテムのみ彩色
		1/10~1/5		緻密度	丁寧
		1/5 以上			ふつう
	時期	春			粗い
		夏		塗り方	厚塗り
		秋			ふつう
		冬			薄塗り
		その他		混色	混色表現
道	形態	空からの道	その他	大小	一部の過大・大小の歪み
		途切れる道		季節	春
		山道			夏
		川に並行			秋
		川を横切る			冬
		川と無関係			その他
ひと	性別	男性		天気	晴れ
		女性			曇り
		両方			その他
	年齢	子ども		時刻	朝
		青年			昼
		成人			夕方
		老人			
		重複			